令和５年度　広報かほく 11 月号より
（一部修正）

シリーズ かほく市の文化財 No.28

有形文化財 編　天保十四年の高札

今回は、市指定文化財「天保十四年の高札（こうさつ）」について紹介し、天保14年（1833）頃の様子を見ていきたいと思います。

当時の社会情勢をみると、天保年間は、冷害に加えウンカ[1]などの害虫の発生により、米が全国的に凶作となり、食料不足になったといわれています。そのため、社会が大きく荒れ、怪しげな人が物乞いとして地方を徘徊し、金品を強要し盗みを働く人も現れたといわれています。これに対し、加賀藩は、怪しげな人に宿を貸すことや物を恵むなどをしてはいけないといった心得について書いた高札を、交通の多い辻や村の入口に掲げさせ、注意を促しました。

この「天保十四年の高札」は、当時の夏栗村に建てられたもので、夏栗村の肝煎[2]（きもいり）だった清水家に伝わったものです。当時のかほく市内が社会的に不安定な状況であったことが伺え、防犯や安全に暮らすためにどうするのかという考え方が今も昔も変わらないことが分かります。

皆さんも今一度、自身のできる範囲の防犯や安全に暮らすためにできることを考えてみませんか？

（1）ウンカ…体長5ミリほどのセミのような虫。稲の葉や茎などから汁を吸い、稲を枯らしてしまう。

（2）肝煎（きもいり）…江戸時代の村の世話役

天保十四年の高札